

tile no.1

# マグリブの装飾タイル

*Decorative Tile in Maghrib*

author 辻 孝二郎 | Kojiro Tsuji

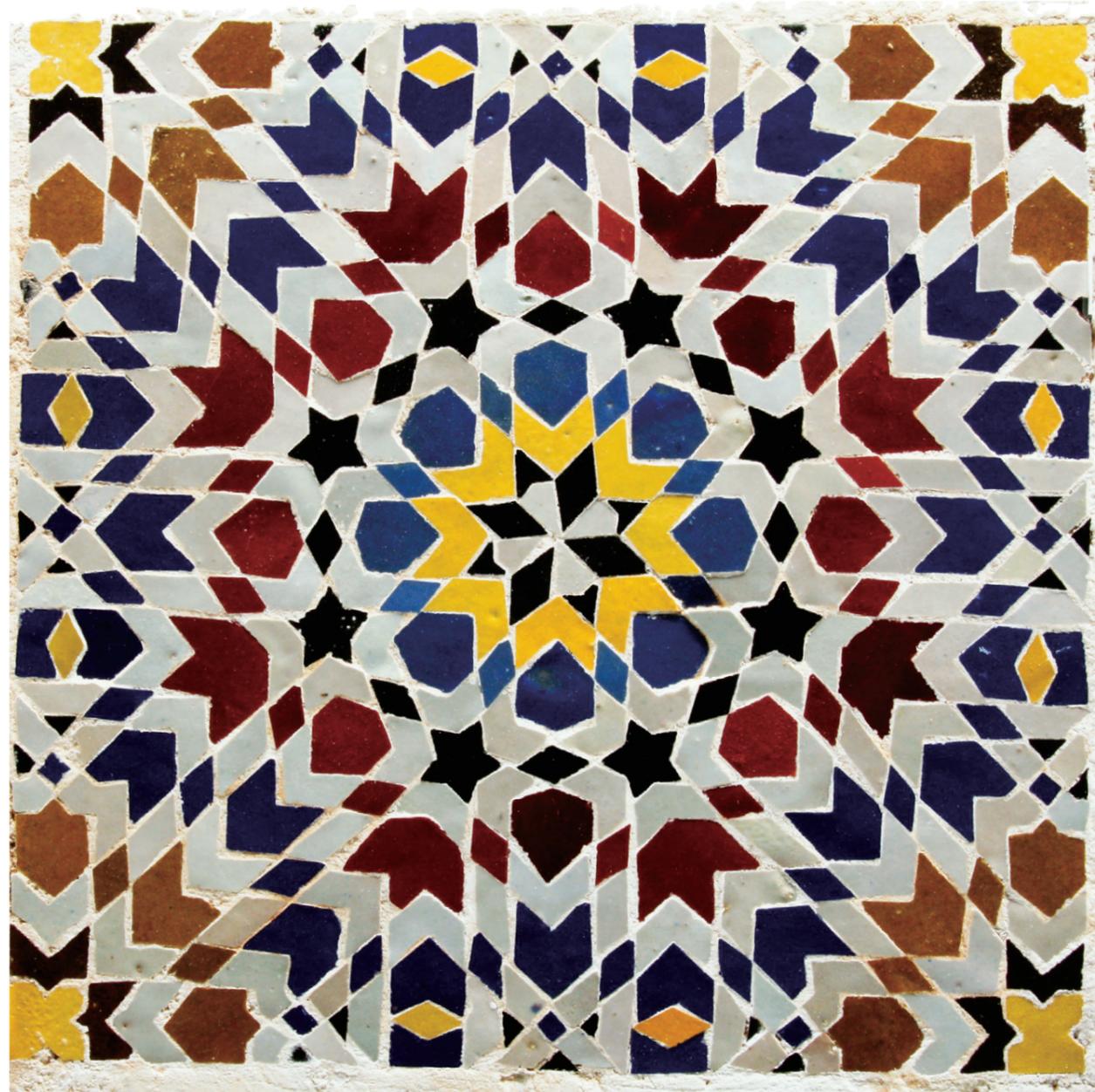
つじ・こうじろう—INAXライブミュージアム館長/1948年生まれ。1971年、早稲田大学卒業。同年、INAX入社。営業、商品企画、XSITEHILL、広告宣伝部を経て、2005年より現職。

## [クローズアップ・タイル]

マグリブの装飾タイル——fig.1

制作地はモロッコのフェズ。このようなカットワーク・モザイクの制作が始まったのは14世紀頃。現在も修復や新規需要のため現地で制作されている。このタイルは1997年制作。サイズは28×28×3cm。多角星形文様のデザインは太陽や神を表すイスラームの典型的な文様。宇宙空間を感じさせる無限の幾何学文様が表現されている

fig.1



## [タイル・ディテール]

タイル小片——fig.2

どんなに小さなタイル片でも、裏側は先が細くなるよう削ぎ落としてある。これによって裏側に十分な量のモルタルが回り込み、隣り合うタイル片をしっかりと捉えることができる



fig.2

## [現代のマグリブタイル]

クエンカ技法による幾何学模様のタイル——fig.3-7

16世紀スペインで考案されマグリブにも広がったクエンカ技法と、当時の幾何学模様を使った現代版タイル。サイズは28×41×1cm、スペイン・セヴィリア製。クエンカ技法とは、型を使い、輪郭を残して文様部分をへこませ、この凹部に色釉を詰めて焼成するもので、モザイクに近い効果が得られる



fig.3

## [マグリブタイルのある風景]

モロッコの古都メクネスにあるマンズール門——fig.8

16世紀の建造で、世界文化遺産に登録されている。建物表面には漆喰装飾とカットワーク・モザイクによるタイル張り装飾が施されている



fig.4



fig.5

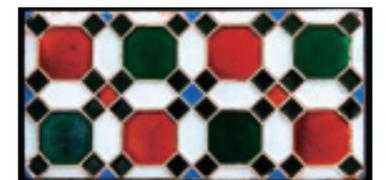


fig.6



fig.7

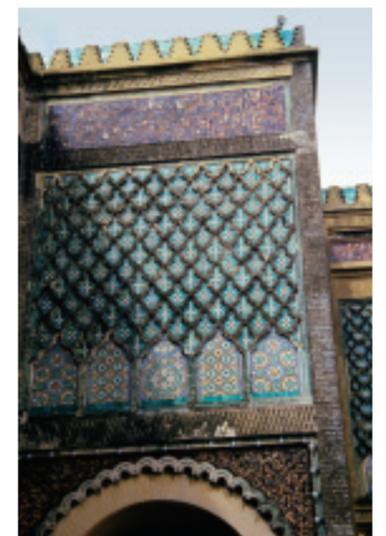


fig.8

- “マグリブ”は北アフリカのチュニジア、アルジェリア、モロッコ地方を指し、「日沈む地・西」のアラビア語といわれている。この地域は中近東とアフリカ、そしてヨーロッパを結ぶ地域でもある。サハラを越えて東アフリカとの交流、カルタゴの繁栄した時代、ローマ帝国の属州の時代、ベルベル人が支配する古くて長い時代、7世紀にはイスラームとアラブ人が流入し、アラブ化が決定的となる。オスマントルコ支配の時代を経て、ごく最近ではフランス支配の時代もあった。青く光る地中海に沿って異文化が合流し渦巻いた地域で、文化や宗教、支配者たちの回廊といえる。
- イスラームでは建築様式は基本的に同じであり、他地区との差異を見出すのは難しい。
- マグリブの建築の仕上げの主な素材は、他地区と同様、黄土色の土や日干しレンガ、白い石灰や漆喰、そして色鮮やかな装飾タイルとなる。装飾タイルは、カットワークが特徴的で、大きなタイルからカットしたタイル小片(モザイク)を組み合わせて面を構成する。さまざまな色で構成されたカットワーク・モザイクと白い漆喰、あるいは土壁との組み合わせはイスラームの美の極致と思われる。
- 左の写真のモザイクは、中央に菱形の黒と、変形四角形の白と黒の組み合わせが、4つずつ配置され(合わせて8つ)、さらにその外側に黄色の変形六角形が8つ配置されている。その外側は青の変形六角形が8つ、青の菱形が8つあり、さらに5つの先端を持つ星が8つ配置され、広がっていく。この8は宇宙や天上を表現するといわれ、イスラーム建築の特徴でもある。青色はトルコ石の青、ラピスラズリーの紺色を使い、イスラーム特有の「聖なる青」の典型的な組み合わせとなっている。天地対称、左右対称で、このタイルパターンを四辺に張っていくと、さらに無限の繰り返しが広がっていく。幾何学的に完成された無限である。
- あらかじめタイル小片を裏返して配置し、石膏などを流し込みパネル状にする。タイル表面側にはフラットな面ができ、パネル化したものを壁や天井、床に取り付けて空間を完成させる。幾何学の天才たちは迷うことなく、裏の形状を頼りに見えない色合いを無造作に合わせていく。そんなタイル工房がまちの一角にあり、今日もタイルをカットし、タイルパネルをつくり続けている。手間がかかり気の遠くなる作業であるが、神や宇宙の永遠性を祈るかのようである。
- ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。